

財団奨学生・米山奨学生紹介

「奨学生の紹介」

2023-24年度財団奨学生

堺 友里

■はじめに

この度、国際ロータリー第2510地区補助金奨学生に選出頂き、今夏よりマサチューセッツ工科大学へ都市計画修士号取得を目的とした大学院留学の機会を得た。インフレや円安等の影響もあり、このような支援を頂戴することに心より感謝申し上げます。ご支援いただく皆様へのご挨拶を兼ねて、自己紹介や志望動機、留学先の概要等を記す。

■大学院留学への経緯

自身は高校時代までを札幌市で過ごし、大学入学を機に地元を後にした。学生時代は、仙台で土木工学を学び、在学中に東日本大震災に見舞われた。毎日のように続く余震、原子力発電所の影響等の不安の中、それでも、復旧・復興のために奔走する教授陣や土木技術者、海外からの研究者、留学生、土木工学専攻の学生でありながら今は何もできないことを嘆く学友の姿を間近に見るうちに、いつか自分も日本社会、国際社会に貢献できればと、防災分野を軸にキャリアを歩みたいと考えるようになった。

大学卒業後は、現在に至るまで土木行政に携わってきた。社会人になりたての頃、将来深刻な少子高齢化が懸念される地域の強靭性を高めるためのインフラ計画立案等に従事し、地域社会の持続可能性を高めることを念頭に、防災・減災に取り組むことの難しさと重要性を学んだ。その後、かねてより自身も防災分野において国際社会へ貢献したいと考えていたことから、ジュネーブにある国連防災機関（UNDRR）勤務を希望し、半年間働くこととなった。UNDRRは、国連組織の防災担当部局として、各国の防災政策実施支援や防災に関する国際的な指針の実施推進等を行う組織であり、自身も各国及び関係機関とともに普及啓発イベント開催やガイドライン作成等を行った。その過程で、防災施策実施に必要な技術者確保や資金調達が困難である等の他国の現状を知るとともに、脱炭素化や気候変動対策等社会の持続可能性向上のために必要な取組に対し、多様なアプローチを行う各国・関係団体の状況を知った。

今後長期的に当該分野で日本社会及び国際社会へ貢献するためには、一度日本という枠組みを外れ、社会の持続可能性向上について、腰を据えて学ぶ必要があるのではないかと考え、今般大学院留学を目指すに至った。

■ロータリーとの出会い

臆気に留学を意識していた頃から、国際ロータリーの奨学生に出会う機会が多く、また、その誰もが志高く、教育や平和構築等の自身の専門分野で国際社会及び地域社会への貢献を目指す魅力的な方々であり、彼らのような人々と一緒に活動がしたいと感じていた。また、高校卒業以降、地元を離れており、地域の地域社会への貢献思いと相まって、当該地区の奨学生へ応募させていただいた。今後は当該地区活動にも、積極的に参加させていただければ幸いである。



国連ジュネーブ本部にて

■MITの概要

当方の留学予定先であるマサチューセッツ工科大学（英名：Massachusetts Institute of Technology, 通称：MIT）は、米国マサチューセッツ州ケンブリッジ市に位置する私立工科大学であり、また周辺にはハーバード大学やボストン大学、タフツ大学等多くの大学・研究機関が集結していることから、その環境はLiving Laboratoryとして名を馳せる。予定所属学科はDepartment of Urban Studies and Planning, School of Architecture and Planningであり、ここで2年間の都市計画修士課程に在籍予定である。同大学他専攻の授業のみならず、ハーバード大学等の周辺他大学の授業履修も可能であり、学生の関心に応じて柔軟なカリキュラムを組めることも特徴となっている。現時点では、Global Climate Policy and Sustainabilityや Economic Development等持続可能性及び経済発展に関連した講義を中心に履修したいと考えている。

大学選びについては、可能な限りの情報収集に努め、プログラム内容、校風、周辺環境、教授陣の研究、在籍する学生の志向等を鑑み、自ずとMITが第一志望となった。世界中から集まる学生、研究者、実務者と過ごす2年間でどのようなものになるか、どのような学びを得ることができるか、今から大いに期待している。

■おわりに

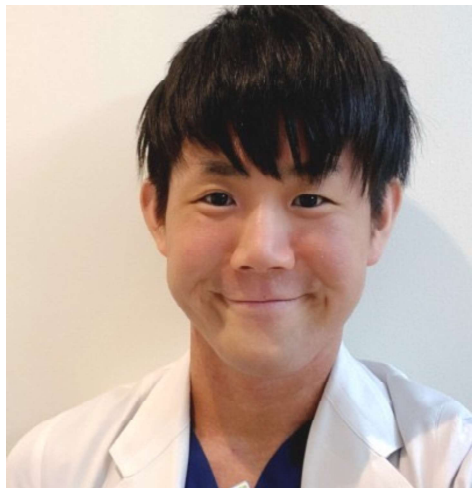
留学が実り多きものとなるよう、留学開始に向け今からできる限りの準備をするとともに、留学後も引き続き持続可能で強靱な社会の構築に邁進すべく、この貴重な機会を最大限に活かし、しっかりと勉学に励む所存である。最後に、今回の留学に際し、当該地区の皆様より多大なるご支援を賜りここに深謝の意を表します。

「自己紹介と留学に向けての抱負」

小林 献

初めまして。ロータリー財団の奨学生の小林 献と申します。この度、ご支援を賜る機会を頂けたことを、この場をお借りして感謝の意を述べさせていただければと存じます。

改めまして、私の簡単な自己紹介と留学へ向けての抱負を述べさせて頂ければと存じます。私は札幌で生まれ育ちました。私が小学生の頃、冬休みの1ヶ月ほど、山口県に住んでいた祖父が毎年札幌に遊びに来ていました。生まれが樺太だった祖父は、北海道をまるで自分の故郷のように感じていたようで、毎年遊びに来ては趣味のスキーや北海道の食を堪能することを心待ちにしていました。当時の私は、祖父が来札すると週末には必ず手稲オリンピックやキロクの雪山まで駆り出され、スキーの手ほどきを受けました。山口県民にスキーを教えられるとはなかなかの皮肉ではありますが、こうして私は育てられ、自信をもって「道産子です」と言えるまでにスキーの腕前も成長しました。



さて、私は大学を卒業した後、医師として働き始めましたが、当時、興味があった分野の最先端を求めて、社会人になり初めて大好きな北海道を出る決断をしました。その後、計6年間にわたり大阪、東京、横浜の病院で研鑽を積んできました。この臨床医の経験は非常に密度の濃いものでした。多くの患者さんを診療する中で、診療スキルが身につく、知識が増え、さらに多くの患者様の役に立てるようになる喜びは大きいもので、夜勤を挟んで丸2日間を不眠不休で診療をしたり、深夜に病院から呼び出されて治療にあたるなども日常茶飯事でしたが、多忙な中に強いやりがいを感じていました。

そのような状態の中で、変化があったのが2020年でした。新型コロナウイルス感染症のパンデミックが発生し、その影響が本格的に日本にも波及したのです。医療需要が既に多い中、病床はあっという間に逼迫し、私の所属していた病院も含め、多くの病院が診療キャパシティの限界を迎えました。複数の病院に救急搬送を断られて、私たちが診察したときには手遅れで助けられなかった患者様や、多忙な中疲弊する医療従事者の同僚を目の当たりにして、自分の無力感や、将来への危機感を感じるようになりました。

日本は世界で最も高い高齢化率の国です。長寿大国であるのは大変誇らしいですが、その一方でこの高齢化の流れは続き、医療を必要とする高齢者の数は今後も2060年まで増え続けると推測されています。状況がこのまま変わらず、何か変革が起きなければ、遠くない未来に平常状態でコロナ時のように医療崩壊が起きるのではと感じたのです。一方で、私は昔から図工や作曲など、何かゼロから新しいものを作ることが大好きでした。自分の医師としての知見を使って、将来、予防医療や治療機器を創り、限られた医療者の人的資本でより多くの患者様を助ける未来に貢献したいと考えようになりました。こうして、2022年度より病院勤務を離れて医療機器開発を行う会社にてインターンを開始しました。

ここでは、医療機器開発の面白さを知ると同時に、日本のヘルスケア業界の課題を知ることができました。日本は医療機器分野では兆単位の貿易赤字で、その素晴らしい技術力にもかかわらず、ヘルスケア業界で発揮しきれていないといえます。一方アメリカは、医療イノベーションのための土台があり、非常に多くの素晴らしい医療機器が次々と誕生しています。そうしたイノベーションを起こす術を本場で学びたいという思いから、米国の経営大学院へ進学を決意しました。

医療機器分野では、技術開発や臨床試験、品質管理や知的財産権の管理など、1つの商品を販売するまでに多くのプロセスがあり、莫大な費用と時間を要します。私が学ぶ予定のコースには、ヘルスケア業界に特化した授業が数多くあります。例えば、医療業界全体の利害関係・力学を学び、どのようにアイデアを事業化するかを学ぶものや、他大学・他学部の学生と協力し、医療サービスの開発・商品化まで実際に行うプロジェクトなども受講予定です。また、各業界の未来のリーダーと共にプロジェクトを行う中で得られる人脈も、今後のかけがえのない資産になると考えています。こうした経験を通じて、日本では学ぶことのできない世界スタンダードの医療機器・医療サービス開発のノウハウ、リーダーシップを身につけたいと考えています。

もちろん、文化や法制度の違いから、将来必ずしも学んだことが適用できない部分も多くあると思います。しかし、学びの環境が与えられ、1歩を踏み出す私の試みに応援を頂けたことを心から感謝して、学べる全てを吸収し邁進していきたいと考えております。今後とも、皆様のご指導ご鞭撻を賜れますと幸いです。何卒、宜しくお願い申し上げます。

2022-23年度米山奨学生

「日韓両国の薬剤師に」

朴 用錫

北海道医療大学・札幌南RC

2018年に韓国から来た北海道医療大学薬学部のパク・ヨンソクです。趣味は旅行と読書、音楽鑑賞で、東野圭吾の小説とai myon、vaundyの歌が好きです。中学校の時にじめられたことがあります。友達がいなかった私には日本の歌は唯一の友達で、歌詞に励まされ乗り越えることができました。その時から私の心は日本に向かうようになりました。学生の頃からボランティア活動をしていて、小さな存在の私ですが、世の中を助けたいと思うようになり、病気の人を助けたいという気持ちで薬剤師という夢を持つようになりました。日本にとって韓国は近くて遠い国だと思います。似ている点がたくさん多くお互いに誤解している点も多いので、日本で生活しながらお互いの文化を共有しながら文化の力でお互いが真の隣国になることを願って努力しています。



留学する前、半年しか日本語を習わないまま日本に来ることになりました。最初は授業を受けるのも大変だし、友達を作るのも難しいと感じて、テレビとドラマ、歌で日本語を習いました。友達とは運動するか、休みの時に北海道旅行を楽しみます。日常生活は韓国での生活とかなり似ていて不便はありませんでした。特に、和食が大好きになって、韓国に行っても友達と日本料理店で約束を取ります。学校の試験が多くて友達と一緒に勉強する時間が多く、良い友達のおかげで未だに色々助けてもらいながら順調な学校生活を過ごしています。

薬学部に入學する前は単純に薬の特徴や化学構造などを学ぶ学部だと思っていましたが、今まで勉強と実習を通じて考えが大きく変わりました。結局何よりも重要なのは人でした。薬が人にどのような作用をして、どのようにして安全に人に良い作用を伝えることができるのか勉強することが一番重要な学部だと思います。薬ごとにその働き、つまり人にどのように役に立つのか添付文書などに記録されています。抗ヒスタミン薬という薬の中に消化障害を助ける薬があって、一般的な用途ではなく皮膚アレルギーに処方されることを病院実習中に知りました。消化器にある薬の作用点、皮膚にも分布しているのが知られて、消化障害と皮膚のアレルギー両方に機能できることを論文にまとめています。さまざまな原因で起こる皮膚アレルギーの治療に、消化器障害を起こす薬を使用することが特に有用であると思います。

今後、日本薬剤師免許取得後、韓国薬剤師免許にも挑戦し、両国の免許を持つことが目標です。日韓の薬の取引や特許などで活躍する人になりたいです。効く薬が無くて苦しむ患者や、高い薬に負担を感じている患者を助ける人になりたいです。



2022-23年度米山奨学生

「環境研究者を目指して」

田影（デンエイ）

酪農学園大学・岩見沢RC

米山奨学生として岩見沢ロータリークラブにお世話になっております、田影（デンエイ）と申します。私は酪農学園大学の環境リモートセンシング専攻の博士課程2年生です。出身は中国の少数民族の内モンゴルです。2016年4月から日本に来て、酪農学園大学の研究生として勉強が始まりました。今はモンゴルの地表面の季節変動と砂漠化について研究しています。中国の大学の4年間で環境科学を勉強して、卒業してから日本文化の体験と自分の専攻分野を深く理解するために日本に留学しています。日本に来たばかりの時は、アルバイトをしながら日本語を勉強しました。アルバイト期間でたくさん日本人とコミュニケーションを取る機会があって、交流能力もどんどん上がって、ゼミ研究室でも仲がいい友達ができました。学習の面では最先端の科学技術など、今まで知らなかった新しい知識を得ることで視野を広げることができました。すごく充実した留学生生活を過ごせています。

昨年の4月から米山奨学生になって、この一年間の奨学生生活を通して、大学と異なる社会経験豊富な皆さんと交流を図ることによって生活の意味を改めて理解し、視野を広げることができて、皆さんから社会奉仕精神を学びました。将来は社会の役に立つ人になって、皆さんの社会奉仕精神を伝承していきたいと思います。また、米山奨学生の使命と役割を改めて理解し、将来の努力する方向性も明確になりました。これは今までの最も成長した点だと思います。これから母国と日本の架け橋になるだけでなく、将来的に社会に貢献し、世界平和のために寄与できる人間になることが期待されていることがわかりました。また、優しいロータリアンとかわいい奨学生たちに出会い、たくさん話ができて、仲良くなるのができて非常にうれしいです。米山奨学生になってとても幸運だと思っています。この縁が繋がりになって奨学生終了後もずっと続けていきたいです。

最後に、日本での学業修了後は日本の企業に就職するつもりです。優秀な環境研究者になりたいです。将来、自分の力で日本と中国の国際関係に貢献して、文化と世界的な環境発展に頑張りたいと思っています。米山記念奨学金のおかげで、学校の研究と生活を両立することができ、心から感謝を申し上げます。

下記は岩見沢ロータリークラブの例会に参加した時の写真です。とても楽しかったです。

